

優秀賞

## 剣道で大切なことは？

京都市立西院小学校 5年 月足 晃太朗

パンツパンツパンツビュッ

九才のぼくは、口をポカンと開けて、母が竹刀を振るのを見つめていた。剣道を始めたのは一年生の時だった。ぼくに剣道をするようすすめたのは母だった。母は剣道の有段者だった。

何事もそうかもしれないが、始めた時ははりきって頑張るし、しかも目新しいから楽しい。先生は優しく指導して下さるし、ぼくは週一回水曜日が楽しみだった。

ところが、四年生の一年間は、ぼくにとって本当に辛い一年だった。なぜなら試合になかなか勝てず、くやしさとあせりがつのった。練習も行くのがしんどいと感じることがあった。今から思うとぼくの心の弱さが原因だ。しかし、母はぼくが休んでも何も言わずだまってぼくの様子を見ていた。

ぼくは、正直この頃、もう勉強も難しくなってくるし剣道に興味を失いつつあったため止めようかと悩んでいた。

しかし、剣道の先生に言い出せず、どうしようかと思っていると、先生がぼくにこう言われた。

「こう太朗、剣道は自分の心を強くするためにあって、今、剣道で心をきたえているのだよ。」

と、ぼくは、その言葉が心にバシッと響いた。九才の時に見た道着の母の姿が目にかんだ。試合に勝つことだけが、剣道ではないと思っただ。人に言われてしぶしぶすることに意味はないと感じる。だから母は、ぼくが休むと言った時、何も言わなかったのかと気付いた。

ぼくは母の試合ではなく、竹刀の素振りだけで、なんてすごいのだろうと感じたのを今も鮮明におぼえている。いつもののんびりした母と全く違った。ぼくも母のようになりたい、強い心をもちたい。

今、ぼくは初心に戻って、竹刀をしっかり握り、心をしっかり強くもち取り組んでいる。